CLANNAD×Littlebusters　バカな友達と仲良くする為の21の方法

RE360

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＬＡＮＮＡＤ×Ｌｉｔｔｌｅｂｕｓｔｅｒｓ　バカな友達と仲良くする為の２１の方法

【Ｎコード】
Ｎ３１４１Ｙ

【作者名】
ＲＥ３６０

【あらすじ】
思考が周りとずれており、親しいクラスメイトと話していても、どこか壁を感じていた少年、水村新。
彼は中学で知り合った、唯一気を許せる友人とも別れ、知り合いが誰も居ない高校へと進学。
また一人なのか、と入学早々考えていた最中、バカ二人と出会った。
クラナドもリトルバスターズも時系列関係無し、シリアス展開無関

係な明るい話を作ろうと思います。

オリキャラ設定

水村　新　（みずむら　あらた）

年齢　１７歳

髪　黒色　長さは恭介と同じくらい

瞳　緑色

誕生日　１０月２１日

好きな雑誌　マガ〇ン

好きな遊び　缶けり

好きな食べ物　唐揚げ

思考は遊ぶ事か食事の事などが八割を占めている。
基本は理樹よりも恭介に近い思考の持ち主。
剣道をやっていたらしいが、今では止めてしまっている。
リトルバスターズのメンバーや、古河ベイカーズのメンバーに加え、
某風紀委員長やおまじないが得意な某宮澤さん等とも知り合い。
容姿は英雄伝説空の軌跡のヨシュアを少々弄った感じです。

～プロローグ～　出合いと自己紹介

小さい頃から、基本一人だった。
特別中が良い友人が居るわけでもなく、友人の様な人と遊んでいても、自分との間には厚い壁が感じられた。

中学生になって、ようやく友人と言える関係をもった。
十中八九の学生が面倒くさいと答える学校も、友人に会うためなら我慢出来たし、正直楽しかった。

余談だが、『類は友を呼ぶ』という言業を知っているだろうか？
簡潔に言うなれば、似た者同士が集まるという意味だ。
認めたくはないが、友人も俺も変人の類いだったらしく、他に中の良い友達はいなかった。

中学三年の春。
仲の良かった友人とはバラバラの高校に入ってしまい、元々両者の家が遠いこともあって春休みになってからは疎遠となっていた。

そして、知り合いの居ない状況で入った高校。
知っている人間が誰一人居ない事程今の俺に辛い事は無く、友人を作ろうにも俺と同レベルの変人がそうそう居るわけがーーーー

「すいません！遅刻しました！！」

「コラ！！棗、お前何処から入ってくるんだ！！」

居た。
棗と呼ばれた男子生徒は、どうやって来たのか教室の窓から入ってきた。
長すぎではないにしろ、俺と同じくらい伸びた茶髪、真紅の瞳、イケメンと呼んでも差し支えない整った顔立ち。
こんな教室の入り方さえしなければ、女生徒からの支持率は昨今の総理大臣より高くなるだろう。

「棗以外は自己紹介が済んだから、お前は今から自己紹介しろ。」

棗は特に嫌がる訳でもなく、黒板の前に立つ。
俺ならあそこまですんなりと動けず、短い間だが固まる事必死だろう。
他の生徒も恐らく反応に大差は無いはずだ。
それらの情報を鑑みても、棗は俺と同等かそれ以上の変人と見てもいいだろう。

「え～棗恭介です。趣味は遊ぶ事、好きな雑誌は週刊少年ジャ○プ、好きな遊びは缶けり、トランプ、鬼ごっこｅｔｃ…好きな食べ物は唐揚げです！よろしくお願いします！」

「くっ……はーっはっはっはっはっ！！！」

前言撤回。
俺はあまりの可笑しさに、静寂に包まれていた教室で笑いまくっていた。

でも、それも仕方ない。
高校生が真顔で「好きな食べ物は唐揚げ」だぞ？笑うわ！

「すいません！寝坊しました！」

「またか！？たくっ、お前はスポーツ特待生の…岡崎か。お前も自己紹介していないんだ。さっさと挨拶して、ＨＲ終わらせるぞ。」

岡崎と呼ばれた男子生徒は、またしても俺と同じくらい伸びた青い髪、薄い青色の瞳、こちらも整った顔立ちをしている。

「岡崎朋也です。趣味はバスケ、好きな雑誌はマ〇ジン、好きな食べ物は唐揚げです。よろしくお願いします。」

流石に岡崎の自己紹介では笑わなかった。
ただ、好きな食べ物が唐揚げで統一された二人が同時に遅刻してくるのはなかなか面白い偶然だった。

「二人の席は……水村の前と隣だ。」

水村、つまり俺の席は窓際の一番後ろの席、いわば特等席だ。
二人が席に座ると、俺は勇気を振り絞って二人に話しかける。

今後も、楽しく過ごせる学生生活を送れると信じて。

「よう、岡崎と棗…だっけ。俺は水村新って言うんだ。よろしくな！趣味は缶けり、好きな雑誌はマガ〇ン、好きな食べ物は唐揚げだ！」

ｍｅｍｏｒｙ：１　アホとバカの日常ＰＡＲＴ１（前書き）

最近忙しい上に、なのはのＳＳばかり進めていて中々更新出来ませんでしたが、やっと更新出来ました！

この「アホとバカの日常」シリーズでとりあえずだせそうなキャラを一通り出してから色々馬鹿な事やってみようと思っています！

memory:1　アホとバカの日常PART1

キーンコーンカーンコーン

始業を合図する鐘っぽい音が学校中に響く。
中庭から渡り廊下まで、どこを見ても生徒の姿は無い。

「ち、ちょっと待てっ！！またこれをやるのか！？止めさせろバカ兄貴！！」

「仕方ないだろう。正人と謙吾が朝っぱらからカツのうばいなんて始めるから……文句なら二人に言ってくれ。」

……前言撤回。
校舎の前で、五人の男子と一人の女子が何かやっている。

その何かとは、真人と袴姿の謙吾と呼ばれた筋骨粒々な男子生徒二人が両手を合わせ、その手の上に茶髪のポニーテールの女子生徒、鈴が乗っていた。

察しの良い人なら分かると思うが、鈴を教室に投げ入れて、教師に代弁させようとしていたのだ。

「ねぇ、やっぱり止めようよ恭介！失敗したら鈴が大怪我しちゃうかもしれないし、恭介も新も急がないと欠席扱いになっちゃうよ？ほら、新も何か言ってやってよ！」

「鈴、覚悟を決めろ！」

「ちょ、何で後押ししようとするのさ！？」

鈴の兄にして、今回の計画の発案者である恭介を止めようとするは黒髪の男の娘……もとい男の子、理樹と、止めるどころか鈴に覚悟を決めさせようとする黒髪の青年、新の二人も居た。

「なに言ってるんだ理樹。第一、これは俺と新の大事な後輩である、理樹達の為を思ってやってるんだぞ？」

最もらしい反論っぽい事を言っているのは、我等がリーダーの棗恭介。

兄妹ということもあって、鈴と同じ茶髪に紅色の瞳、女子生徒に人気があるというのも頷ける容姿をもった整った顔立ち。

「僕らの為とはいえ、鈴が怪我したらどうするのさ？」

「大丈夫だ。真人と謙吾の力なら必ず鈴を投げ飛ばせるし、鈴の身体能力なら教室に入る事も可能だ。仮に失敗したとしても、俺と新で受け止めてみせる。」

「その自信の根拠は？」

「ある。」

「どんな根拠なの？」

「第六感。」

この通り、顔は良くても頭の方は少し残念だが。
それでも恭介のスペックは正直かなり高く、運動神経から発想力まで群を抜いており、リーダーとしてのカリスマ性もあってか、リトルバスターズの皆は結局の所、恭介の言う事に従って動いている。
そのおかげで彼ら、野球チーム”リトルバスターズ”の名は校内中に広まっている。

「よし、準備が出来たみたいだな。真人、謙吾、やってくれ。」

「よしきた！行くぜぇ、謙吾っち！」

「あぁ、行くぞ、真人。」

「うぅ…やるしかないのか……」

準備万端の真人と謙吾、やりたくない、という念を身体中から発している鈴。
そんな三人を、まるで少年の様な輝かしい眼で見つめている恭介と、鈴が怪我しないように祈っている理樹と新。
そして、校舎の壁に反響して響く恭介の決め台詞。

「ミッションスタート！！鈴を教室の窓に投げ入れろ！！」

「いっくぜぇぇぇ！！！」

「うおらぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

遠ざかる鈴の悲鳴を合図に、今日も今日とて彼らの非日常な日々が始まりを告げていた。

「死ぬかと思ったぞコラァァァ！！」

ゴスッ！！

「うっうっ……次は手加減します……」

「もう二度とやらん！！というか、前も同じ事言ってたぞ！？」

鈴の膝蹴りという名の訴えが真人の鳩尾にクリーンヒットする。

朝のＨＲの最中に鈴は教室に投げ入れられ、クラスメイトはおろか、教師まで呆けていたが、以前にも同じ事があったため、生徒はすぐにリトルバスターズの仕業だと理解していたし、教師も既に慣れたのかすぐに冷静になり鈴の出欠を確認していた。

しかし、この非日常たる日常に慣れつつも納得していない女生徒が、色の髪をたなびかせ理樹に詰め寄る。

「直枝、さっきのあれはなんだ？以前はもう二度とやらないと聞いていたが？」

「さ、坂上さん……まぁ止められなかった時点で僕にも非は有るんだろうけど、一つだけ言い訳をさせてくれないかな？」

「何だ？」

「僕はやめた方がいいってちゃんと恭介達を止めました。」

「結果が伴わなければ意味がないだろう。既に教師達もこの程度なら、と諦め始めているが、生徒会長としてお前達の愚行を見逃す訳にはいかない。」

そう。

生徒会長にして近隣の不良共に畏怖を抱かれる程の運動神経を持つ、坂上智代その人だ。

「待ってくれよ坂上！理樹は悪くねぇんだ！悪いのは俺と謙吾なん

だ！」

「真人の言う通りだ！理樹を責めないでやってくれ。」

「バカ二人は黙っていろ。先程も言ったが、止めようとしても止められないなら意味はないだろう。とはいえ、止めずにただ見ているよりは何百倍も良いがな。」

ぶぇっくしゅん！！

「とにかく、あんな危険行為を繰り返して学校に迷惑でもかけてみろ。下手したら退学になりかねんぞ？」

「だ、だから悪いのは俺達何だって！責めるなら俺達にしろよ！」

「何度言ったらわかるんだ。バカは黙っててくれ。」

「てめっ！触りまくってバカうつすぞ！！」

「ほう……やれるものならやってみろ！」

突然の喧嘩の予兆に、クラスがざわめき出す。

だが、喧嘩の中心部が真人と智代と知ると、クラスのざわめきが一気に野次馬の歓声へと変わる。

「言っておくが、私は手加減出来ない質だ。怪我をしても文句は言

うなよ？」

「上等だ！てかお前、さっきと言ってること逆じゃねぇか！？」

「よし！なら久々のバトルランキングといくかぁ！」

……

諸悪の根源である恭介が窓から現れた。

「お～い！恭介、今どうなってる？」

諸悪の根源ｐａｒｔ２の新も窓から現れた。

「棗！水村！何故窓から降りてくる！？いったい何度注意したｒ……」

「よーし皆ぁ！！真人と坂上に武器を与えてやれ！！」

智代は恭介と新に説教をしようと試みるも、新の一声で周囲の野次馬軍団が投げ掛けてくる武器（？）の数に圧倒され、呆けていた。

「はぁ……うちの生徒は何故こうも勉学に関係の無い物ばかり持ってくるんだ……」

訂正。
くだらない物を投げてくる野次馬に呆れていた。

「坂上！バトルランキングの説明いるか？」

「要らない。何故ならやる気が無いからだ。」

自分の側にある黒ひげ危機一髪を蹴り飛ばし、吐き捨てる様に言う智代。

周囲の野次馬の興奮が冷めつつある中、恭介と新は諦めていないらしく、二人でひそひそと会話をしていた。

「よし！坂上、それならこんなルールを追加しよう！お前が一位になり、二十四時間守り通したら俺達は二度とこんなことしないと約束しよう！」

「……必ず約束を守るという保証は？」

「……誓ったんだ……」

「何？」

恭介が顔を俯かせ、何時になく真剣な面持ちで喋り始める。

「必ず約束を守るって……誓ったんだ……」

「誓った？誰にだ？」

「他の誰でもない！この、俺の魂にだっ！！」

……

某オレンジ頭の死神風に叫ぶ恭介のせいで、教室中に冷た～い空気が流れた。

「さっき読んでた漫画の影響か？ネタが唐突過ぎるんだよ！」

ガッ！！

「いてぇな！何も殴ることないだろ？」

「これが俺流のツッコミなんですぅ～。」

「ま、まぁ約束を守るというのはもう分かったから、そのバトル何とかという遊びのルールを教えてくれ。」

「あぁ、バトルランキングの遊び方は至って簡単！周囲の野次馬が投げてくる物を無作為に手に取り、それを武器として戦う。だが、女子はハンデとして武器を拾う際、武器を選んでも良い。そして、自分より順位が下の奴や、順位が自分より三つ以上上の奴に対戦を

申し込むのもダメ。」

要約すると、

・武器は野次馬が投げてくる物を無作為に拾う。ただし、女子はハンデとして選んで拾っても良い。
・対戦の申し込みは、自分より順位が一つか二つ上の人しか申し込んではいけない。
・対戦に勝った人は、負けた相手に好きな称号を与えられる。

恭介が説明を終えると、周囲の野次馬はまたしてもテンションを上げて武器を投げつけ始める。

「よし！俺の武器はコイツだ！！」

「ならば、私はこれだ。」

早々に武器を手に取った真人と智代。

だが、武器を選べた智代はともかく、目を瞑って無作為に武器を取った真人は、武器に対する不満を口にする事すら忘れていた。

「……なんじゃコリャ……」

真人が唯一放った一言には、”驚愕”という二文字がタップリと込

められていた。
野次馬も思わず野次を飛ばす事を忘れ、真人の手にある武器を見ていた。

「な、何で俺の武器が”豆腐”何だよ！？！？」

誰が投げたのか、真人の手には買ったばかりの豆腐の姿があった。

「まぁ落ち着け、真人。」

「何だよ新！！」

「先人の言葉には、”豆腐の角に頭をぶつけて死ぬ”というものがある。だが、普通に考えたらそんなこと有り得ない。」

「何が言いたいんだよ！？」

すると、新は決め台詞を言う様に良い顔を作って言う。

「だが、筋肉を極めたお前なら、豆腐の角で坂上を打ち負かせるはずだ！行け、筋肉の使徒よ！！」

「おぉぉ！！何かよくわかんねぇけどスゲェ話だな！」

真人が新の話に感銘を受けている間に、理樹が新の側に近寄って一言。

「豆腐投げたの新でしょ？」

「うん？よく分かったなぁ！」

「だってさっきの台詞、どう考えても真人を陥れるために考えた嘘じゃないか……」

「おいおい、人聞きの悪い。俺はとある伝承を真人に教えただけだ。それに、こんな馬鹿話で他人を騙せる、と思うほど俺は落ちぶれてはいないって！」

「うわぁ……ホント質が悪いんだから……その話したら確実に真人が納得するって分かってて……」

つまり、新は遠回しに騙される方が悪いと言ってるのだろう。

新と真人が馬鹿をやっている間に智代も武器を手に取っていた。

「サ、サッカーボール？」

「言い忘れていたが、拾った武器は本来の使用方々で戦う事。」

智代は武器として拾ったサッカーボールを床に置き、戦闘の準備を進め、真人も豆腐を容器から取り出していた。

「恭介！こっちは準備ＯＫだぜ！！」

「こちらも準備は出来た。」

「よし！バトルスタートだっ！！」

真人の攻撃

豆腐を智代の顔に叩き付けた

べちゃ

０のダメージ！

「……」

「……お、俺の……豆腐……」

「……井ノ原……覚悟はいいか？」

智代の攻撃

サッカーボールを蹴って真人の顔にヒットさせた

１４６のダメージ！

真人の攻撃

「ち、ちくしょう……豆腐がねぇと攻撃出来ねぇ！」

「プッ……真人！豆腐の屑を智代に投げつけてやれ！」

「そ、そうか……よし、行くぜぇ！！」

真人は床の豆腐の屑を智代に投げつけ始めた！

びちょびちょびちょ

「……」

「……おい、新……全然使えねぇじゃねぇか……」

「つまり、お前の筋肉はまだまだ筋肉革命を起こすには弱い、という事だな。」

「な、何ぃ！？こうなったら、今日から訓練メニューを倍にしねぇと！！」

「……井ノ原……許さんぞ……」

智代の攻撃

ボールを蹴って真人の顔面に当て、跳ね返ったボールをまた真人に当てまくった！

１５７のダメージ！

１３９のダメージ！

１４２のダメージ！
１７３のダメージ！
クリティカルヒット！３９９のダメージ！
智代の勝利！

「まったく……豆腐まみれにして来るとは……」
顔に付いた豆腐をハンカチで拭き取る智代。
だが、智代にはまだやることが残っていた。

「おい、坂上。」
「何だ、水村？」
「称号忘れてるぞ。」
「……バカ一号。」
「ちっくしょぉぉぉぉ！！！」
真人の叫び声を背に、恭介と新は教室を後にした。教室の窓から。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

真人と智代のバトルより少し前。恭介の机の周りに四人の男子が会話していた。

「おい、棗。妹を教室に投げ込むなんて驚異的な行動を、よく二回も実行出来たもんだなぁ。」

三年D組の教室、類は友を呼ぶとは正にこのことか、D組ではいつも恭介に新、不良のレッテルを張られている岡崎朋也、春原陽平の四人が休み時間には必ずいずれかの机に集合して話している。

そして本日の話題とは、朋也が先程指摘した恭介のミッションについてだ。

「仕方ないだろ?あの状況じゃ、ああするのが一番おもしr……べストな行動だったしな。」

「いや、別に言い直さなくても……僕にも妹がいるけどさぁ、芽衣にはあんな事させられないね。ていうか、まず成功する所が想像出来ないし。」

陽平の言う通り、普通の思考の持ち主ならあんな自殺行為ともとれる行動が成功するなんて思うはずない。

だが、恭介はそんな有り得ない様な行動をいくらだってしてきたし、

そのミッションに失敗はほとんど無かった。

「まぁ、普通は無理だろうな。だが俺は、鈴の身のこなしと真人と謙吾の腕力なら必ず成功すると信じていた。」

「なんて一方的な信用なんだ……」

「新こそ人の事言えるのか？前にバイクで不良の集団が学校に乗り込んできた時、なんだかんだ言いながら一番暴れてたのはお前と二年の坂上だろ？」

「あぁ……あの日はたまたまテストの点が最悪で機嫌が悪かったからな。不可抗力だ。」

以前に、この学校には二度不良が乗り込んできた事がある。

一度目は四人程の人数で、進学校で気に入らないという理由で校庭で暴れていたのを、二年の坂上智代が瞬殺した。

二度目は二十人程の人数で、智代にやられた仲間の仇討ちという名目で暴れていたのを見かねて、智代に朋也、リトルバスターズからは恭介に真人、謙吾に新と鈴、それから他メンバーの来ヶ谷唯湖、能美クドリャフカ（正確には犬）のメンバーで不良を完膚なきまでに叩き潰していた。

「ん？この感じは……」

「どうした？棗。」

唐突に何かを感じ取った恭介。

座っていた椅子から立ち上がり、窓の上に飛び乗ると

「理樹達が面白そうな事してるから行ってくる！」

とだけ言い残し、窓から飛び降りて行った。

だが、奇行を行ったのは恭介だけではなかった。

「俺も行ってくる！また後でな！岡崎、春原。」

新も恭介の後を追って窓から飛び降り、下の階の教室へと向かった。

「ホント、あいつらの奇行っぷりには驚かされてばかりだな……」

「僕も、教室の窓から出入りする奴なんて初めて見たよ。」

空を眺めながら、呟く二人。

その二人の元に、一人の女生徒が近づく。

「朋也君、春原さん、ちょっと良いですか？
」

二人の側に寄ってきたのは、三年Ｂ組の古河渚だった。

クラスが別々であるため、渚が朋也達と会うのは昼食時か、放課後のどちらかだ。

因みに、朋也の家庭の事情により、渚と朋也は一つ屋根の下で暮らしている。

「どうしたんだ、渚？」

「渚ちゃんがうちのクラス来るなんて珍しいねぇ。」

「そ、それがお父さんからの伝言で、――――――――。」

「「……え？」」

渚のこの一言で、近々壮大な日がやってくる事を、まだ皆は知らずにいた。

memory:1　アホとバカの日常PART1（後書き）

如何でしょうか？
個人的にはありがちかと思ったのですが、もしよろしければ感想をいただけるとありがたいです。

という訳で、次回はPART2です！
一応主人公設定なので、新を使って学校内のキャラをある程度登場させようと思います。

新「今思ったんだけどさ、俺ってリトバス勢と古河ベイカーズ勢のパイプ役として登場させられただけじゃ？」

RE360「今気付いたの？今さら～（笑）」

新「ウッゼェ……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3141y/

CLANNAD×Littlebusters　バカな友達と仲良くする為の21の方法

2012年1月6日19時52分発行